

よみさんぼ

大宮見沼



第11号

写真家 野口勝宏

やどかりの里発！ 地域発見マガジン

特集 リサイクルの輪

市民がつくる“おおみやリサイクルマーケット”22周年

編集 公益社団法人やどかりの里「大宮見沼よみさんぼ」編集委員会

特集 リサイクルの輪



市民がつくる“おおみやリサイクル マーケット” 22周年

原田 ^{ふみ}史さん
(ゴミは宝会)

リサイクル・環境・福祉を考える「祭り」

市民会館おおみやの西隣、山丸公園で年に4回、定期開催されている「おおみやリサイクルマーケット」をご存知でしょうか？ 知る人ぞ知る、このイベント。第1回が開催されたのは、今から20年以上も前、1993（平成5）年のことでした。

おおみやリサイクルマーケットは、個人の利益を目的としたフリーマーケットではありません。リサイクル活動を行う市民団体・障害者団体・ボランティア団体等の市民グループが参加し、リサイクルマーケットの運営を通して、リサイクル・環境・福祉を考える「祭り」として開催され、その収益は各団体の活動資金として活用されています。第1回は、13団体が参加。私たちやどかりの里の事業所も第1回から参加しています。9月に行われた第87回までの参加団体は100を超え、現在も約15団体が継続的に参加しています。

今回は、そのイベントの立ち上げ当初から関わり、今も支え手の1人として中心的に活動する「ゴミは宝会」の原田史さんにお話を伺いました。

原田さんは、自宅の門の側にガラス瓶回収用ドラム缶を設置したのをきっかけにリサイクルの活動を始め、今まで多くの人との縁を得、つなげてきました。そのご縁が、原田さんを第1回おおみやりサイクルマーケット準備会へとつなげていったのです。

開催に至る経緯

おおみやりサイクルマーケットの立ち上げには、2人の男性の出会いが大きく関わっています。1人は、公民館で牛乳パックの回収を始めた市職員のK氏。その頃、公民館で集められた牛乳パックは聴覚障害者施設「どんぐりの家」で回収され、どんぐりの家の活動資金の一助となるシステムでした。しかし、回収量も増え、どんぐりの家に対応しきれなくなったことで、事業の継続が難しくなり、K氏は頭を悩ませていました。もう1人、当時やどかりの里の職員だったS氏もまた、障害者福祉活動に限界を感じていました。そんな2人が出会い、リサイクルと環境・福祉問題を考える祭りをやろうと、第1回準備会を呼びかけたのです。そこには原田さんを含め、リサイクル活動団体、障害関係団体、市環境部が参加。「リサイクル・障害者・ボランティア」をキーワードに掲げ、非営利活動であることにこだわり、フリーマーケットではない、「おおみやりサイクルマーケット」が誕生しました。

追い風となった環境問題

1980年代後半、地球温暖化の進行とフロンによるオゾン層の破壊が進んでいることが明らかになり、地球環境に関する関心が世界的に高まりました。1990年代に入ると、日本でも、資源やゴミの問題などリサイクルの重要性が社会的に認知され始め、リサイクルという大きな波が巻き起こった時期です。

その頃、旧大宮市でも、年々増えるごみ処理費用が問題となっていました。旧大宮市では、当時の市環境部長が環境行政の大改革を行い、ゴミの定曜収集や東部リサイクルセンターの建設が決まったのもこの時期だそう。もともとは可燃と不燃しかなかったゴミの分別も、新たに資源ごみが分類されるようになりました。市民活動としても、原田さんのようにごみ減量・リサイクルの活動に関

心が広がり、団体も立ち上がってきていた時期でした。そんな社会的背景も、おみやりサイクルマーケットの立ち上げの追い風となったのかもしれませんが。

常連のお客様に支えられ……

当初、大宮市役所前広場で開催されていたりサイクルマーケット。第3回を迎える頃には参加団体も増え、山丸公園で開催するようになりました。最初の2年間は、旧大宮市環境部の職員の皆さんが運営に協力してくれていたのですが、徐々に行政の全面協力が難しくなり、後ろ盾を失いました。しかし、実行委員会で各団体が関係を築いていたこともあり、市民の力の見せ所と協力して乗り切り、常連のお客様に支えられ、回数を積み重ねてきたのです。長年続くリサイクル自転車の抽選販売は、今もたくさんのお客様を集めています。3周年、5周年、10周年、15周年……皆でリサイクルマーケットの周年記念を祝いながら、あっという間に23年目を迎えようとしています。

おみやりサイクルマーケットのこれから

今は実行委員会という形では集まっていますが、参加団体は準備会2回、評価会1回の計3回集まり、和気あいあいと運営について話し合います。その時話題になるのは、お客様からの声。「休憩スペースが欲しい」との声にイスとテーブルが置かれ、1人でも多くのお客さんの目に触れるために、幟が出るようになりました。

現在、「ゴミは宝会」としてだけでなく、埼玉エコ・リサイクル連絡会の理事、旧大宮市の頃から、現「さいたま市廃棄物減量等推進審議会」の委員としてもリサイクルの活動に取り組んでいる原田さん。原田さんが思うおみやりサイクルマーケットの良さを聞いてみました。

「地面にシートを広げ、物をたくさん広げて、参加団体の人が座っていて……顔の知れた常連のお客様と、『今日は〇〇はないの?』『△△さんは出てないの?』そんな会話を楽しみながら、リサイクル品のやり取りをしている。そんな人と人との距離感を楽しめる、ほのぼのとした雰囲気がいい」

大宮東口開発等の動きがあり、山丸公園での開催をこれからも続けていけるのか……ということが目下の懸念事項とのこと。

「開催から20年を超え、2年後には第100回を迎えようとしている今、おお

みやりサイクルマーケットは曲がり角にいるんだとを感じる」と原田さん。山丸公園が使えない間、場所を変えて開催する方法もありますが、場所によっては、22年という年月をかけて築いてきたお客様とのつながりが切れてしまうかもしれない……開催しない方法もあるけれど、それによって、おおみやりサイクルマーケットを開催し続けてきた歴史が止まってしまう。続けていきたいという思いと、「このまま続けられるのか」という不安が交錯します。おおみやりサイクルマーケットが産声を上げてから22年、団体に関わる人も高齢化し、参加を断念する団体も出てきていること。これらも今後の継続を危ぶむ理由になっています。「リサイクル・障害者・ボランティア」に関わる多くの団体がどんどん参加して、支えていってくれたら……という思いも聞かれました。

キーワードは「リサイクル・障害者・ボランティア」。地球環境の問題は、おおみやりサイクルマーケットが始まった1990年代から、形を変えながらも、今も変わらない社会問題の1つです。

障害者の問題も、この20数年でどれだけ変わったのでしょうか。私たちは、自分に直接関わることでないと、問題を自覚しづらくなります。東日本大震災や原発の問題も、日常の中で薄れていきがちではないでしょうか。環境の問題を活動につなげ、多くの人に伝えていくこと……今回のインタビューを通して、それを継続してきたおおみやりサイクルマーケットの22年の開催の意味に触れた気がします。

環境にも、そこで暮らす人たちにも優しい街につなげたい…そんな思いを大切に、おおみやりサイクルマーケット。足を運んで、リサイクル活動を体感してみたいか？
(記 宗野 文)

おおみやりサイクルマーケット

・年4回（3・6・9・12月第1日曜日）
10：00～13：30

山丸公園（さいたま市大宮区吉敷町）
にて開催 ※雨天の場合、翌週に順延

・参加団体も募集中！

お問い合わせ：代表 久慈：048-756-9670



あの街 この街 俊一郎が行く・5

筋書きのない旅

リヨン行きの車中にて

その時、私は夕日が差し込む電車の中で、この2日間に起こったことを思い返していました。夏のヨーロッパの昼間は長く、車窓に広がる牧歌的な風景を照らしています。その長閑^{のどか}な風景を見るうちに、それまでのざわめいた気持ちを冷静な思考が覆っていきました。

事故の代償

事故から一夜明けて、体は案外調子がいい。貴重な旅先での時間、前日の後始末に時間を取られそうでした。決して語学が達者なわけではないので、的確に理解できているか自信もないが、手元にメモしてある通りに関係各所をまわらなくてはならない。最初は不動になってしまった車の中に、あらかたの荷物を残してきているので取りに行く必要がありました。

その場所へは、バスで行かなくてはなりませんでした。しかし、乗り継ぎに失敗。1日に1本しかない乗り継ぎのバスは、バス停の場所を確認しているうちにトコトコと遠くのほうへ行ってしまいました。仕方なくヒッチハイクを試みるも、からかい半分で絡んでくる車はあっても、乗せてくれる人はいません。そりゃそうだ、場違いな外国人にそうそう警戒を解くのも難しい。そんな風に思いつつめげずに続けていたら、一台の車が停まってくれました。今度は、こっちが遠慮したくなるようなオンボロのワンボックス。中には腕に刺青をしたさわやかな兄さんと、ビーグル犬のような犬一匹。つづりが子音だらけで読むことも出来ない目的地の地名を書いたメモを見せると、乗せて行ってくれるという。

ゆっくりを楽しむ

道中、この兄さんと会話してみると、とっても平和主義者。夏休み中、車であちこちキャンプをしてまわっているらしい。随分ゆっくり走るの、そのことを話題にしたら「気忙しく生きていることはかっこいいことではない。それでもっ

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



て事故でも起こしたら、もっとかっこよくない。それよりも、自分のペースで生きるほうが素敵だろ」と耳の痛い話をしてくれる。確かに、いろいろと詰め込みすぎたこの旅行は、少々無理があったのかもしれない。そして、その目的から外れたところにこういった出会いがあったりするのかもしれない……

目的の場所は、事故現場近くのガソリンスタンドでした。再会した車は大きく変形していて、改めて落ち込みました。続いて、最寄りの警察署に行つて事故に関する事務処理を行う。映画にでてきそうな感じのノリの軽い警察官のイヤミにイライラしつつも用事を済ませると、近場の駅までパトカーで送ってくれるという。駅で時刻表と路線図を見比べ、最寄りの大都市リヨンを目指しました。

そして旅は続く

かくして、予定の大幅な変更を強いられつつも、旅は続けられました。幸い、途中合流する友人がいたこともあり、電車移動に必要な路線図や時刻表などを急遽用意してもらい、待ち合わせの場所パリへ。前々日の国際電話で時間と場所を決めるも、確信の持てないまま待ち合わせ場所で待っていると、黄金色の夕陽を背に友人が現れました。糸が切れた風船が漂うような日々が終わり、再び意思をもって旅が続けられるようになった瞬間でした。

晩秋のある頃

旅の恥はかき捨て……とはいかず、帰国後も自分の行いの後始末に追われているうちに、その暑い夏は過ぎていきました。気がつけば木の葉も枯れる頃、知らない住所から国際郵便が届き、開けてみたらびっくり。連絡先を交換していた救急隊のマダム（前回登場）からでした。手紙と救急隊オリジナルのカレンダーが入っていて、挿絵には私がお世話になった救急車もありました。ほろ苦い思いがよみがえると同時に、なんだか「気にするな」と言ってもらっているような救われた気持ちになりました。こんな筋書きは、F先生の授業にもありませんでした。

よみさんぽ 日誌

みんなで作る「やどかりテラス」

さいたま市見沼区中川 562 番地、現在やどかりの里の法人本部と、サポートステーションやどかりの建物が建っている場所です。みんなはここを「里」と呼び、やどかりの里の法人設立を記念した「里祭」もここで開催されています。

かつては、「本館」と呼ばれた木造 2 階建ての建物、「会館」と呼ばれた 3 階建ての施設、そして、「別館」と呼ばれた建物が 3 つ並んで建っていました。しかし 2012 (平成 24) 年 10 月、3 階建ての施設の改装工事に伴い、建築法上の問題から思い出深い「本館」を壊すことになりました。それから丸 2 年、この跡地を有効に活用できないか、という声が上がるとなり「やどかりテラス」としてリニューアルすることとなったのです。

早速、よみさんぽでもお馴染みの都祭設計士を交え、テラスの構想を練る中で、埼玉県の緑化事業への申請も検討。単に緑化することだけでなく、地域の防犯・防災といった観点や、地域交流といった内容も含めた一大プロジェクトとなっていました。

9 月には 2 回にわたってワークショップを開催。移動販売車を使った CAFÉ、おしゃべりできる空間、四季を通じて楽しめる花々、収穫も楽しめる果実、夜道の暗さをカバーする外灯、災害時にも活用できる井戸を掘るなど、「やどかりテラス」のアイデアがたくさん集まりました。10 月 1 日に県助成事業決定の通知が届き、これから工事に着工となります。年内完成の予定です。

子ども連れ、ペット連れの人たち、ご近所のみなさまの散歩途中の寄り道ポイントとして、立ち寄りたくなるようなテラスにしていきたいと考えています。そして、やどかりの里の仲間たちも気軽に訪れる場になるように、設備の工夫だけでなく、たくさんのイベントを企画しながら、常に人が集まる、人の笑い声が絶えない場所になればと願っています。完成後も、そこを利用する人たちの意見を取り入れながら、常に「みんなで作るやどかりテラス」として、発展させていきたいと思えます。

完成の際にはぜひお立ち寄りください。

(記 大澤 美紀)

やどかりの里の仲間たち・10

頼もしいお母さん集団「お助け隊」



浦和区には、精神障害のある人たちが集い、仲間とおしゃべりや悩みを相談しながら過ごす憩いの場、浦和活動支援センターがあります。毎週水曜日には、バランスのとれた昼食を提供しています。管理栄養士の資格を持つ職員が手軽にできる献立を考え、腕を振るうのは主婦歴ウン10年のベテランお母さんたち。300円のランチは好評で、毎週部屋はギュウギュウ詰めです。

このお母さんたち、実はお子さんやご兄弟が精神疾患を抱えていて、家族として障害のある人を支えています。「ランチづくりを手伝ってもらいつつ、日頃の思いを出し合いませんか」と声を掛け、6月に「お助け隊」ができました。

砂賀初美さん(72歳)は「こっちがお助けしてもらいたいわよ～(笑)」と言いながら、ご自宅にある百年物の糠床で漬けたキュウリや大根をランチの付け合せに持参してくれます。昼間政江さん(74歳)もご自分の内科疾患の経験から、参加メンバーに「食事はきちんととらなきゃだめよ」など教えてくれます。ランチの時間をはなやかにしてくれるのは、布施秀子さん(63歳)の明るい笑い声。斉藤キミ枝さん(71歳)は、「皆さん、頑張りましょうね!」とお助け隊を引っ張ってくれます。

月1回程度開かれるお助け隊の集まり「お助け会」では、ランチはお手伝いできないけど……というお母さんも参加し「子どもが、昨日寝られなかったから調子が悪いの」「急に機嫌が悪くなっちゃうから、どう話してあげたらいいか難しい」「自分たち親が亡くなったらどうしたらいいかしら」など、お互いの悩みを打ち明けたり、障害のある子どもとの接し方を話し合ったりしています。

お助け隊の活動はまだまだ始まったばかり。これからお母さん(お父さん)仲間

を増やし、互いに支え合い、それぞれの人生経験を活かしながら、憩いの場やメンバーをいろいろな形で“お助け”する心強いチームを目指します! (記 渡邊 奏子)



あなたの街のやどかりさん

浦和区障害者生活支援センターやどかり

豊かな暮らしのお手伝い

さいたま市の障害者生活支援センター

浦和区障害者生活支援センターやどかりは、2007（平成19）年に現在の場所で活動を始めました。障害者生活支援センターは、2006（平成18）年に障害者自立支援法が施行されたことをきっかけに、さいたま市全区に設置されました。市から相談支援業務の委託を受けた民間の法人が、10区それぞれの支援センターを運営しています。やどかりの里では浦和区、大宮区、見沼区の3区で、精神障害のある人やご家族の相談窓口を担っています。

どんなことを相談できるの？

障害者生活支援センターには、日々さまざまなご相談が寄せられています。

「体調によって家事を行うのが大変」「働きたい気持ちはあるが、いきなり働くのはまだ自信がない」「今は家族と暮らしているけれど、将来のことを考えると不安」……生活のこと、働くこと、経済的なことなど十人十色のご相談があります。障害のあるご本人やご家族からの相談だけでなく、ご本人を見守る地域の方、関係機関などからの連絡もあります。相談内容によって、手続きを進めたり、専門機関をご紹介したり、定期的にお話する機会を設けたりと、どんなことが必要かを一緒に整理し、対応しています。

自分らしい生活を送るために

障害のある人の中には、生活に必要な資源や仕組みを活用して暮らす人が多くいます。日々の生活では、体調によって家事など身の回りのことが大変な時もあります。自宅にヘルパーが訪問し、調理や掃除、買い物など苦手や大変だと思うことを一緒に行う制度があります。お金のやりくりや、大切な書類の管

第 11 回

今回ご紹介する「浦和区障害者生活支援センターやどかり」は、JR北浦和駅西口から徒歩約10分、国道17号線沿いの建物の一面にあり、食べ物屋さんや自転車屋さんの中に並んで開所しています。日々、障害のある人たちのさまざまな相談が寄せられています。

理や手続きへの不安をサポートする制度を利用する人もいます。

フルタイムで働けるようになりたい、自分のできるペースで働きたいなど、就労の目標も人によってさまざまです。さいたま市内には、そんな「働きたい」をかなえるために、障害のある人の就労を支援する事業所があります。軽作業や食べ物の製造・販売を担う事業所など、自分に合う場所を選ぶことができます。働くのはまだ難しいけれど、まず外に出て人と交流する機会をつくりたい、という人が利用している地域活動支援センターもあります。

障害者生活支援センターでは、安心・安全で充実した暮らしが送れるような、生活を組み立てるお手伝いをしています。

障害のある状態になった時に、どうして良いかわからず家族だけで悩んで、長い年月が経つことも少なくありません。早い段階で必要な支援とつながるために、障害者生活支援センターを含めた支援機関がより身近に感じられるよう、広めていきたいと思っています。自分のこと、家族のこと、お知り合いの方のことなど、相談してみようかなと思った方は、お住まいの区の支援センターにぜひご連絡ください。

(記 八木由美子)

浦和区障害者生活支援センターやどかり

住所 さいたま市浦和区北浦和 5-6-7

レジデンス北浦和 104

TEL 048-793-6373

*やどかりの里が運営している3区の障害者生活支援センターはp14をご覧ください。



本がつなぐ人との出会い

並木せつ子さん

(元さいたま市図書館司書)

JR北浦和駅西口にある浦和区障害者生活支援センターから、自転車で5分。線路を挟んだ向こう側に、さいたま市立北浦和図書館があります。今回は、この図書館を中心に長年図書館員として浦和の地域に親しまれた並木さんにお話を伺いました。

図書館員として30数年……

1974(昭和49)年、北浦和図書館は開館しました。並木さんは北浦和図書館を始め、旧浦和市内の他の図書館の開館にも関わってこられました。予算にも限りがあり、図書館主催の講演会などは、ご自身のネットワークを駆使し、無償でお願いできる講師を招くこともありました。また、並木さんがデザインしたさいたま市図書館のキャラクターを、100円ショップのグッズを活用した着ぐるみを作成。それをイベントに登場させるなど「お金がなくても何とか



なる」と、創意工夫を重ねて図書館活動を幅広く展開してきました。

そんな並木さんが「やどかり出版」の存在を知ったのは旧浦和時代。利用者からのリクエストもあり、やどかり出版の本を少しずつ図書館で購入してきました。

本の中で出会った図書館利用者

ある時、やどかり出版の「70歳を目前にして今、新たな一歩を」を図書館に取り寄せた並木さん。表紙に写る男性を見て、すぐに常連の図書館利用者だと気づいたそうです。この男性、やどかりの里のメンバーである堀澄清さんです。堀さんはたい



へんな読書家で、印象深かったということ。本を通じて利用者の人生に触れ、並木さんは堀さんの幸せを喜んでいました。

思いがけず1冊の本が、やどかりの里のメンバーと並木さんをつないでいました。(※この文章は堀さんの了解を得て掲載しました)

地域の「窓」カウンター業務

「ある市では図書館業務を企業に委託して注目を集めているところもあるけれど、図書館は人を呼ぶだけが目的ではないんです。10年後、100年後も見据えて図書を収集し、その時どきに発行された郷土の出版物をきちんと集めることも大切な役割です」と並木さん。堀さんとの出会いをつないだカウンターも、現在さいたま市では外部委託され、以前のように図書館員が直接利用者とやりとりすることが少なくなったといえます。「地域が見え、図書館員としての目を養う場所がカウンター業務。一部の業務だけ切り離してしまえるものではありません」と、現在の図書館や、さまざまな制度を切り分け、公費削減の対象を広げている政策のあり方を危惧されていました。

書棚の中の「浦和」

「本が好き、触っているのが好き」という並木さんは、浦和にまつわるさまざまな分野の本を図書館友の会発行の「友の会だより」に5年かけて紹介され、2008(平成20)年にはそれらをまとめた「本と浦和」(さいたま市中央図書館)を発行されました。

現在は、ボランティアで図書館の本の修理や製本、点字の絵本を本にする作業など、本に関わる活動を続けています。「本は針と糸で綴じるのに、ボタンがとれてもそのまま。自分の服にはアイロンなんかかけないけど(笑)、辞書のページには1枚1枚アイロンをかけたり……本に関わることは手間も厭わないんです」とにっこりされる並木さん。本紙「よみさんぼ」も、すぐに地域資料として最寄りの図書館に寄贈してくださいました。

毎年10月に開催される「やどかりの里大バザー」にも、品物を提供してくださっています。図書館員としてだけでなく、個人としてもやどかりの里を支えてくれています。

あらゆる出版物に愛情を注がれてきたお話しを伺い、図書館に行きたくなりました。皆さんも本を通じて、新しい出会いを発見しませんか？

(記 渡邊 奏子)

インフォメーション

大切な衣類は安心安全の

クリちゃんマーク

のお店へ

クリちゃんマークはクリーニングの専門店のしるしです



春日ランドリー

〒337-0013 さいたま市見沼区新堤 152
東宮下団地 19-5
TEL 048-685-0811

OA機器
事務機器

オフィス用品

ソフトウェア のことなら

主な取扱商品

印刷機・複合機・FAX・事務用品・幼稚園ソフト

地域に根付いて36年
教育産業株式会社
<http://www.kyouikusangyou.co.jp>

さいたま市見沼区南中野301-1 TEL:048-685-0855
FAX:048-685-0726

こころの悩み、ちょっと話してみませんか…?

お住まいの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい



見沼区障害者生活支援センターやどかり

電話; 048-682-1101

大宮区障害者生活支援センターやどかり

電話; 048-795-4720

浦和区障害者生活支援センターやどかり

電話; 048-793-6373

～精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です～



エプロン



学校グッズ



防災ずきん

公益社団法人 やどかりの里

すてあーず

南中野 844-22 イエローハウス
Tel/688-8223

布製品をオーダーメイド製作いたします!

お気軽にご相談ください。

1F リサイクルショップ「すてあーず」営業中!

Tel/687-4483 (直)



新刊案内 やどかり出版 〒337-0026 埼玉県さいたま市見沼区染谷 1177-4 TEL 048-680-1891

JD ブックレット 1



私たち抜きに私たちの
ことを決めないで

藤井 克徳 編

2014年6月 定価1,000円

JD ブックレット 2



病棟から出て地域で
暮らしたい

藤井 克徳 長谷川利夫
増田 一世 著

2014年9月 定価1,000円

やどかり研究所主催 やどかりサロン

片柳に生きる

～生まれ育った地で歩んできたこと、そしてこれから～

黒白秀之さん

(有限会社黒白洋蘭園 代表取締役)

とき：2014年12月20日(土) 13時30分～(開場13時)

会場：やどかり情報館2階ホール(さいたま市見沼区染谷1177-4)

黒白さんは、もともと農家だった家業を22歳から引き継ぎ、洋蘭栽培、販売事業と展開させてこられました。洋蘭栽培はとても難しい技術を要するようですが、グローバルな視野でかつ地道な顔の見える信頼関係を築きつつ事業を展開、2010(平成22)年には第59回農業コンクールで農林水産大臣賞を受賞しています。一方で、地元・片柳の地で、人と人とのつながり、そして近くに広がる見沼田んぼをととても大切にされています。この7月には、近くの神社で古くから伝わるお祭りを、地元の人たちと共に60年ぶりに復活させました。

黒白さんの、その土地や人々をまるごと包むような「地域へのまなざし」は、組織や分野を越えて、これからの街づくりへ深い示唆を与えて下さるでしょう。わが街への思いを馳せ、共に未来を考えませんか。

<参加のご案内>

- ◎ 参加費 一般 1,000円
- ◎ 申し込み 会場準備の都合等ございますので事前申し込みが必要です
お問い合わせ先
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷1177-4 やどかり情報館
TEL 048-680-1891 FAX 048-680-1894
- ◎ 申し込み締切 2014年12月10日(水)



作者紹介

写真家 野口勝宏さん

1959年猪苗代町生まれ。写真家。「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と花作家・橋本和弥氏とともに「Flowers of Fukushima」シリーズを制作。本年開催された福島県観光キャンペーン「ふくしまプレDC」においてJR東日本のメインイメージに起用され、駅構内や車両装飾を彩る。また、キャノンギャラリー銀座・梅田・仙台・札幌での個展を開催。著書に「ここは花の島」などがある。11月には成田国際空港でも写真展開催予定。同シリーズの作品は <http://noguchi.jp.com> にて閲覧可能。

表紙：クリスマスローズ

街がざわついてくるこの季節はいつになっても心浮き立つものだ。外気の冷たささえ明るさに変えてしまうこの花のすがしさが、冬を楽しむ気持ちを運んできてくれる。

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぽ 第11号

発行 2014年10月(秋号)

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

* 弁当の調理・配達パートさん募集

やどかりの里が運営しているまごころでは、日替わり弁当の製造・販売を行っています。昼食弁当の調理と配達をするパートさんを募集しています。(主な配達地域は中央区周辺)

曜日/木・金 時間/8:30~12:30

詳細は直接お問い合わせください。

まごころ (中央区本町東 5-9-7)

TEL 048-857-2783 (担当 檜山^{ひやま}うつぎ)

自分史や自伝を

本として残しませんか?

出版のプロが安心と信頼の技術を提供・サポートします

やどかり出版 さいたま市見沼区染谷 1177-4

Tel.048-680-1891 Fax.048-680-1894